未来視青年とリーズナブル探偵女

第二話『ロブスターが視えたんだ』（初稿）

脚本　海山純平

【登場人物】

空木光斗（からき・みつと）
早坂琴子（はやさか・ことこ）

コウ
月影英華（つきかげ・えいか）

ボンド（本多（ほんだ））
テッド
受付

（回想）一話振り返り

琴子N「前回までのあらすじ～」

光斗N「必要か？」

琴子N「ほら、途中から視聴する人とかたまにいるじゃないか。その為だよ」

光斗N「毎回これやるのか！？」

琴子N「未来が視える眼を持つ青年・空木光斗は、その能力を活かし、占い師をやっていたが全然儲からずにいた。そんな彼の前に突如、謎の女性が現れた」

光斗N「あんたじゃん」

琴子N「私の跡を付けてきた光斗は」

光斗N「言い方！あんたが占い料金払わなかったからだろ！？」

琴子N「未来視を使って私を二度助けたお礼に、一緒で中華料理屋で食事をすることに。そこで食い逃げの常習犯を見事撃破！」

光斗N「厳密に言うと、あんたの仕事に巻き込まれたんだけどな、僕」

琴子N「謎の女性の正体はなんと「どんなじ

みな依頼でも安く受け付ける『リーズナブル探偵』なのであった！」

光斗N『『何でも屋』でいいんじゃないか？」

琴子N「光斗は、私と一緒に居れば、未来がわかっていても日常を楽しめるのではないかと思い、助手になる事を決心！はたして、光斗の運命やいかに！」

光斗N「死にそうな言い方するな！」

琴子N「回想終了」

暗転

光斗N「これ毎回やるのか？」

琴子N「…さあ？」

探偵事務所・事務所スペース・昼

仕事机で漫画を読んでる琴子。

ドアが開いて光斗が入って来るが、その動きは鈍い。手にはエコバック。

光斗「あたた…買ってきたぞ～」
琴子「ご苦労様。いや～助かったよ」
光斗「お客用のお茶請けなんて、別に今日じゃなくてもいいだろ？誰も来ない予定だろ？」
琴子「後回しにしていたら、クセになってしまうだろ？思い立ったが吉日さ」
光斗「なら、あんたが買いに行けば…あたた」

エコバックをローテーブルに置く光斗。直後、腰に手を当てる。筋肉痛の様子。ソファに腰を下ろす。

琴子「まだ筋肉痛なのかい？若いだろうに」
光斗「そもそも、田植え作業を依頼として引き受ける探偵事務所が…ここにあったな…というかあんたは、殆ど農家の人と談笑していたじゃないか！あんたも少しは…」
琴子『『あんた』じゃなくて『琴子さん』。言葉遣いは大目に見てるんだから、せめて呼

び名はちゃんとしてくれないかい？」

苦虫を噛み潰したような顔の光斗。

光斗「琴子…所長」

琴子「あ。逃げた。しょうがないなあ」

光斗「（溜息）…にしても」

事務所全体を見回し、最後に琴子を見る光斗。

漫画を手に「なにか？」な顔をする琴子。

光斗「事務所の内装はともかく、所長はなんというか…探偵って感じが皆無だな」

琴子「君は上司にとことん遠慮が無いねえ！「探偵っぽさ」？まさか君、探偵はインバネスコートにハンチング帽な格好だと思ってないかい？」

光斗「いや、そこまでは…」

琴子「探偵は普通、目立たない者だよ」

再び漫画を読む琴子。

ジト目で琴子を見る光斗。

光斗M「僕はこの人を信じて助手になったけど、早速雲行きが怪しいな。…この人と一緒なら『未来がわかっていても退屈しない日常』を送れると思ったんだけど…。というか、目立たないって言ってるけどこの人自身、不思議な雰囲気があるんだよなあ」

唐突に未来視が働いて、未来が視えた。

ローテーブルの上にロブスターが乗っている光景が視えた。

複雑な表情の光斗。

光斗M「…何でロブスター？」

はっとする琴子。漫画を閉じ机に置く。

琴子「あ。探偵っぽい秘密道具ならあるよ」
光斗「まじか！もしかして、特殊な眼鏡とか腕時計とかスケボーとかか？」
琴子「どこの探偵をイメージしてるのか敢えて聞かないよ」

「やれやれ…」といった体（てい）で仕事机の下の引き出しを開け、中身を探る琴子。ボールペンを出し、カチッとキャップを押す。

琴子「まずコレ！」
光斗「…見た感じ、ただのボールペンだな」

ニヤついた顔の琴子。

光斗「これのどこが秘密道具なんだ？」
琴子「・・・・・」
光斗「おい、どんな道具なんだ？」

琴子「・・・・・」

光斗「ニヤニヤしてないで説明してくれ！」

もう一度キャップを押す琴子。

琴子「どうもありがとう」

キャップを二回、早押しする琴子。

ペンから音声が流れる。

ペン『「…見た感じ、ただのボールペンだな」

「これのどこが秘密道具なんだ？」「おい、どんな道具なんだ？」「ニヤニヤしてないで説明してくれ！」』

前のめりになり、目を見開く光斗。

光斗「さっきの僕の声？！」

琴子「録音機能付きペンだよ。最大５時間まで録音できるさ。続いての商品は…」

光斗「通販か！」

引き出しから一機のドローンを出し、机の上に置く琴子。

ドローン本体下部には、細長い円柱状の筒と、鉄製の箱の様なのが付いている。

不思議そうな顔でドローンを見る光斗。

琴子「はいこちら『マシンガン付きドローン』」

光斗「急に物騒な方向になってきたな！？」

琴子「大丈夫。秒間６００発で『粒すけ』を発射するだけだよ」

光斗「連射性が凄いわりに弾は米粒かよ！しかもここでも『粒すけ』登場かよ！」

琴子「弾が米粒で威力が低いし、直ぐ弾切れになっちゃうから、仕事で使った事ないんだよ」

光斗「普通に米の無駄遣いじゃないか！カメラ付きドローンの方がまだいいぞ」

琴子「まあまあ、次のはちゃんと凄いから安心したまえ」

引き出しから今度はジッポライターを出す琴子。見た目は普通のジッポライターである。

琴子「じゃん！」

光斗「この流れからして、ただのジッポライターじゃないんだろ？」

琴子『ジッポライター型火炎放射器』ていうんだけど」

即座にソファの後ろに隠れる光斗。

光斗「名前だけでわかった！！実演はしないでくれ！」

琴子「勿論だとも。こんなに小さいけど、威力と範囲がえげつないからねえ。耐熱と書かれた物を悉く溶かしていったし」

光斗「なんで物騒な物しかないんだよ…」

道具達を引き出しにしまう琴子。

光斗「その道具達は所長が作ったのか？」

琴子「いいや。とある発明大好き人間がいてねえ、彼女に作ってもらったのさ」

光斗M「彼女…女性なのか？どんな人なんだろ？」

琴子「最近は音信不通だけど、何やってるんだか……」

物憂げな顔になる琴子。

琴子の表情にやや疑問を抱く光斗。

事務所のドアがノックされる。

ドアに視線がいく二人。そして光斗は琴子を見やる。

光斗「今日、依頼人は来ない筈だろ？」

琴子「その筈だけど…」

またもドアがノックされる。

琴子「一応、出てくれないかい？やばそうな宗教の勧誘だったら「私の信じる神は手塚治虫様だ」と言えばいいさ」

光斗「それ漫画の神様だろ！……しょうがないなあ」

ソファから腰を上げ、しぶしぶドアに向かう光斗。

光斗M「あれ？ここの玄関って確かインターホンがあったよな？何で押さないんだ？」

同・玄関

ドアを開ける光斗。しかしそこに人は居なかった。

不審に思いながら周囲を確認する。

下の方から物音がしたので視線を下に

向ける。
そこには、ロブスターがいた。
硬直する光斗。やがて

光斗「…ナンデ、ロブスター？」

同・事務所スペース
椅子に座ったまま腕を組んでいる琴子。
眉を顰めている。
仕事机の前に立ち、右手にロブスター
を持ったままの光斗。
無言の間。

琴子「ウチはペット禁止です。捨ててきなさ
い」
光斗「飼うつもりはない！入口にいたんだ！
どこかから逃げて来たんじゃないか？」
琴子「う～ん。この辺でロブスターを扱って
る飲食店は無いけど…」
コウ「突然の訪問で失礼します」

間。

琴子「君〜。急に腹話術を披露してどうしたんだい？しかも女性みたいな声じゃないか」

コウ「いえ。私が発声しております。厳密には、スピーカーから音声を出していますが」

間。

琴子「君〜…」

光斗「いや、わかるだろ！このロブスターが喋ってるだろ！……喋っただって？！！」

同・数分後

ソファに並んで座る琴子と光斗。

正面のローテーブルに鎮座するロブスター。

冷や汗が止まらない光斗。

営業スマイルの琴子。

光斗M「ローテーブルにロブスター。さっきの未来視通りだけど、それ以前に……」
光斗「（小声）どういう絵面だよ、これ。なんでロブスター相手に委縮してるんだ僕ら」
琴子「お茶請けどうしようかな？ロブスターて普段、何食べてるんだろ？」
光斗「そこかよ！」
琴子「とりあえず、自己紹介しておこう。（コウへ）初めまして。私はこの事務所の所長をしております、早坂琴子です。こっちの、体の８５％は水分でできているのが、助手の空木光斗です」
光斗「ナメクジじゃないぞ僕は！」
コウ「初めまして。私は月影英華博士に作られました、ロブスター型ＡＩのコウと申します。女性という設定です」
琴子「月影英華……なるほど彼女の」
光斗「いや待て！設定が多くないか！？え、ロブスター型ＡＩ？！何だそれ？！」

琴子「落ち着きたまえ。彼女の発明品ならこういうの作ってても不思議じゃないだろ？」
光斗「……まあ、あれらを見せられたら…」
琴子「それで、コウさんはなぜ私の所に？何かご用件があるのですか？」
コウ「はい。早坂琴子さんとナメクジさんにお願いしたい事がございます」
琴子「なんでしょう」
光斗「おい、ナメクジさんて僕じゃなよな？」
コウ「博士を…月影博士を探して欲しいのです」
琴子「人探しですか。……私は月影博士とは知り合いですが、ここ最近、音信不通で気になっていたのです。依頼の経緯を詳しく聞かせて下さい」
コウ「はい」

（回想）研究所・朝

工具や資料等があちこち散らばっている。壁には計算式や何かの設計図があ

ったりと、整理されていない。
部屋の真ん中にテーブルがあり、コウが鎮座している。
体にコードが何本も接続されている。

コウ（声）「二日前の朝、充電が完了した私はいつものように起動しました」

ハサミの手を器用に動かし、プラグを自ら外す。
周囲を見回す。しかし、誰もいない。

コウ（声）「しかし、博士の姿が見当たりませんでした」
光斗（声）「単に寝室かトイレとかじゃないのか？」
コウ（声）「私も最初はそう考え待機しましたが、８時間経っても博士は現れませんでした」
光斗（声）「めっちゃ待機したな！？」

器用に別のテーブルに飛び乗ったりして、あちこちを散策する。

コウ（声）「結局、博士の行方は分からず仕舞いでした」

探偵事務所

琴子「ウチにいらしたのは、どうしてでしょ？」

コウ「博士は私に、あらゆる情報データをラーニングしてくださりました。その中で「なんか困ったらリーズナブル探偵事務所へ行くべき」というデータがありました。マップも、早坂琴子様の事も入力済みでした。

……ナメクジさんは予想外でした」

光斗「空木光斗だ！」

琴子「では、依頼内容はつまり…」

コウ「はい。ご迷惑をお掛けしますが…」

光斗「……これはまさか」

コウ「『月影博士はなぜ急に私を手放したの

か？』『今どこにいるのか？』この二つの謎を解明して下さい」

琴子「はい、引き受」

光斗「待て待て待て！」

琴子の発言を慌てて遮る光斗。

光斗「（コウに）一応聞くが依頼料……お金は持ってるのか？」

コウ「持っていません」

光斗「（愕然）今回は収入無し、か……」

琴子「まあまあ。がめつい事を言うもんじゃないよ。いい宣伝文句になるじゃないか」

光斗「どんな？」

琴子「『人外の依頼もウェルカムな事務所！』なんてね」

光斗「怪しさが倍増じゃないか！」

コウ「いざとなれば、私のパーツを売っても構いません。どうか博士の捜索をお願いします」

琴子『依頼料が無い場合は体の一部を換金します』。（おおげさに）…この宣伝文句はさすがにねえ～」

光斗「あああもう分かった！タダ働きするよ！」

琴子「ありがと～。（コウに）コウさん。貴方のご依頼、引き受けます」

コウ「ありがとうございます」

後は任せた、という感じで光斗の肩に手を置く琴子。

琴子「はい頼んだよ」

光斗「（キョトンと）……は？」

琴子「君の眼の出番じゃないか。博士と再会する未来を視て、居場所を突き止めようじゃないか」

光斗「いや待ってくれ、ここは所長の出番だろ？…月影博士だっけ？面識あるんだろ？居場所知ってるんじゃ……」

琴子「さっきも言ったけど、最近は音信不通

なんだ。それに話を聞いた限りだと、研究所に居ないみたいだから、私はお手上げさ。それに、君の未来視で視れば、瞬時に解決だろ？」

光斗「（渋々）なんか釈然としないが、とりあえず視てみるか」

コウ「あの、何のお話をされてるのでしょうか？」

琴子「ああ、説明は後でしますので。（光斗に）さあ、初陣だ」

光斗「了解。そうだな…明日の様子を視るか」

右目だけでコウを見て、意識を集中させる。

断片的に未来が視える。

街中を歩く光斗。肩に掛けたエコバックにコウが居る。

光斗M「？…これは……違うよな？」

光斗「明日ではないか。…なら二日後」

再び意識を集中。
公園のベンチに腰掛ける光斗。その隣にコウが居て会話をしている様子。

光斗M「…ほんとどういう絵面だ、これ？」
光斗「え～と、三日目」

集中して視る。
川原でコウと光斗が会話している様子が視えた。

光斗「（呆然）・・・・・・」
琴子「その顔だとハズレっぽいね」
光斗「…四日目！」

ノイズが掛かった未来。
気合を入れる光斗。
やや大きく、白い建物が視えた。
もっと視ようとした途端、右目に痛み

が走る。

光斗「ああっ！！…ぐ」

琴子「どうしたんだい！？」

光斗「僕が視れるのは最大で、四日先の午前までなんだ…。無理に視ようとすると、眼が痛む。もう一度……！」

四日先の午後をもう一度視ようとする光斗。

琴子が光斗の肩を、強めに握る。

制するような掴み方だ。

琴子「待った。もしかして、結構な負担が掛かるのかい？」

グッと息を呑む光斗。悔しさの混じった表情になる。

光斗「…ああそうだよ。ま、何度かやれば慣

れてくる」
光斗M「ストレッチと似たような感じだ。最初は痛むが、繰り返せば先に進める。この未来視だって初めは、次の日しか視えなかった」
琴子「ふ～む。とはいえ今はキツイんだろ？なら、無理はさせたくないね」
光斗「…一瞬だが、ちょっと大きい白い建物が視えたぞ」
琴子「白い大きい建物、かあ。ヒントにしてはねえ……」
光斗「……悪かったな、役立たずで」
琴子「いいや。何も知らずに頼んだ私が悪かったよ。君が気にする事じゃない」
コウ「調査をした結果、わからなかったという事ですか？」
琴子「…ええ。ですがまだ、別の方法があるのでご安心を」
コウ「はい！自分、頼れるのがここしかないので、マジお願いしますっ！」

琴子・光斗「「・・・・・・」」

二人して「え。今の口調なに？」な顔で沈黙。

コウ「申し訳ありません。対博士用モードが起動しました。以後気を付けます」

光斗「『対博士用モード』！？」

琴子「え～と…何でしたら、喋りやすい口調でいいですよ？」

コウ「ありがとうございます……」

少し静かになるコウ。やがて身振りの付いた動きで喋り出す。

コウ「どうもっす！こっちが対博士用モードの自分っす！正直、こっちの方がよく使っていたので喋りやすいんすよ～。ああ～堅苦しいのって苦手ですわあ…」

光斗「キャラ変わり過ぎだろ！？」

琴子「はは。彼女の好みのタイプが窺えるね」
コウ「それでなんすけど、別の方法ってなんすか？それで博士の居場所わかるんすか？」
琴子「ああ。探偵の情報網を甘く見ないでくれよ」
光斗「所長までいつもの口調かよ！さっきまでのお客様対応はどうした？」
琴子「ここはもう、お互い仰々しいのは抜きと行こうじゃないか」
コウ「そうしてもらえると、マジ助かるっす」
光斗「博士はどんなキャラ設定にしたんだ？」
コウ「なんか『活発系後輩女子』って言ってました。ラノベ読みながら」
琴子「お気に入りのキャラがその本にいたのかなあ？」
光斗「ここまでカスタムする程だからな…。んで、別の方法って何するんだ？」
琴子「いい情報屋が居てね。今日の夜、ＢＡＲに行くよ。大抵あの店に居るだろうし」
光斗「おお、「ＢＡＲ」か！大人っぽいな」

琴子「一応私、二十歳は過ぎてるよ？」
コウ「博士はよく「ＢＡＲには殺し屋が稀にいる」と言ってましたんで、要注意っすね！」
光斗「博士って二次元好きなのか？」
コウ「アニメ鑑賞しながら「眼福眼福」って呟いてました」
光斗「決定だな！！」

コウと光斗が盛り上がってるのを眺めながら、ひとり思いふける琴子。

琴子Ｍ「にしても…白い大きい建物か。……ちょっと嫌な予感だね」

（回想）研究所・夕
散らかっている研究所。
作業台で何かを作っている月影英華。
その様子を窓際に寄り掛かりながら眺める琴子。

英華「（作業しながら）この前のメカはどうだったよ、ミス・琴子。君の望み通り防犯グッズ方面で作ったけど？」
琴子「なかなかの代物だったよ。ジッポライターと思って相手は油断すること、間違いなしだろうね！（小声）……使う機会が無いといいけど」
英華「ご満足、という事かな？」
琴子「ああ、そうだよ」
英華「そいつはよかた～！っははは！ケホッ、エホッ、ッ……」
琴子「英華。きみ食事してるかい？睡眠時間はどれくらいだい？」
英華「オゥ～。耳を塞ぎたくなる質問だねえ」
琴子「そこまで自分を犠牲にして、どうして発明をするんだい？「作りたい」から？」
英華「オフコース！面白い物を作るのは面白いからねえ！……でも、一番は」
琴子「一番は？」
英華「アタシの作ったメカで、相手がスマイ

ルになるのが、やっぱ一番だね！！科学こそが人の進歩であり、科学こそが人を幸せにして、アタシの発明こそが…幸せな笑顔を、一つでも増やしていくのさ」

琴子「今は何を作っているのかな？誰の依頼だい？」

英華「依頼ではない。ちょっとしたトライさ！自律行動するＡＩを発明しているとこでねえ。漫画やアニメでよく見る「ロボット」ってやつを作ってるのだよ」

琴子「ＡＩか…。人間の仕事を奪うと恐れられてる存在だね」

英華「ノンノン。例えどう思われようと、科学は…人間の味方さ。アタシが身を削ってでも証明してみせるよ。エホッ、エホッ」

琴子「（ポツリと）君って奴は……」

儚げな表情で英華を見つめる琴子。

咳き込みながら作業を続ける英華。

事務所・夕

琴子M「最後に会ったのが、あの日だったかな……」

コウに視線を移す。

光斗と会話をして、盛り上がっている様子のコウ。

複雑な心境で見届ける琴子。

繁華街の端・夜

琴子を先頭に光斗。

光斗の肩から掛けられてるショルダーバッグの中に、コウが入っている。

繁華街の奥に行く程、飲食店や酔客の数も減っていく。

一軒の店の前で立ち止まる琴子。

琴子「ここが情報屋がいる店、『mole（モウル）』だよ。助手君の今後の為に、挨拶しておかないとね」

光斗「ああ、そうか。了解。……というか、何で店名がモグラなんだよ…」

ＢＡＲのドアを開ける琴子。

Mole 店内

カウンターやテーブル、椅子は木材を基調としており、レトロな雰囲気の内装であった。カウンターにバーテンダーらしき紳士的な男性とカウンター席奥に、男性客が一人のみ。

光斗「なんというか…ドラマみたいだな」

琴子「落ち着く雰囲気でもあるだろ？マスターの配慮さ」

光斗「確かに。変に高級感あるよりいいな」

カウンター席に腰掛ける二人。

コウの入ったバッグを空いている隣の椅子に置く光斗。

バーテンの男が近寄って来た。

テッド「いらっしゃいませ。お久しぶりですね」

琴子「やあテッド。元気にしてたかい？」

マスター「お陰様で。…ご注文は何になさいますか？」

光斗M「そういえば普段からお酒を飲んでるとこ見た事ないけど、何を注文するんだろ、この人」

琴子「養命酒・ロックで」

光斗、がくっと崩れる。

光斗「薬局でも買えるじゃないか！」

マスター「かしこまりました。いつものですね」

光斗「いいのかよ！？てか、いつもＢＡＲで養命酒飲んでるのか！？」

琴子「仕方ないじゃないか。お酒の種類なん

て詳しくないから」
光斗「メニュー見ればいいじゃないか」
琴子「それより、君も何か頼んだら？奢るよ」
光斗「いや、僕はまだ未成年だけど……」
琴子「……まじで」

カウンター席の奥の方に座っている男性客が、笑う。背広にサングラス、体格はいい。掘りの深い顔。

ボンド「…ふふふ。これはアカデミー賞ものだ。相変わらずだな、ハリー」
光斗「（小声）うわっ。なんか絡んできた。どうする？」
琴子「…ここに居ると思ったよ、ボンド」
光斗「え！知り合い？！」
琴子「彼が件の情報屋だよ。挨拶しておきな」
光斗「あ、ああ、そうか。（ボンドに）初めまして、助手の空木光斗です。…よろしく」
ボンド「…ははは。おいハリー、お子様を雇

うとは、これはアカデミー賞ものだ」
光斗「さっきからハリーって言ってるけど、誰だ？」
琴子「私だよ。ここではハリーという名さ」
光斗M「まさか、本名は隠した方がいいていう、暗黙の掟が…」
琴子「本多（ほんだ）さんも元気にしてた？」
光斗M「あるわけじゃないようだ。本名、自然だな」
ボンド「ここじゃボンドだぜ、ハリー！」
琴子「そうだった、これは失礼」
光斗「どういう店なんだ、ここは？」
ボンド「…おっと、この世界の秘密が知りたいか？ミッチ」
光斗「待て、秘密以前にミッチって僕の事か！？早速変なあだ名をつけられた！」
琴子「このお店は見ての通りお洒落だろ？このお客さんは皆、無駄にカッコつけた振る舞いをしなきゃいけないんだよ」
光斗「面倒なルールだな…」

琴子「雰囲気を大事にしなきゃ、さ。ちなみに上手く振舞えるとバーテンのテッドのテンションが上がるよ。現にほら」

テッド、シェイカーをノリよく振っている。

光斗「なんか楽しそうに振ってるな！？まさかテッドもあだ名か！？」

ボンド「…ハリー、久々の再会だ。俺からの奢りだぜ」

ボンド、手元のグラスをスライドさせて琴子のもとへ。綺麗にカウンターを滑っていくグラス。

光斗M「おお！これもテレビで見るやつだ！」

琴子「これはどうも。いただくよ、ボンド」

琴子、受け取ろうと手を出すが掴むの

に失敗。グラスは軌道を変えてカウンターの外へ。
床に落ちガシャンと割れる。

琴子「あ」
ボンド「・・・・・・・」
光斗「・・・・・・・」
琴子「・・・・・・・」

若干、気まずい沈黙。

ボンド「…ふふふ。おいハリー、俺は地球に奢ったつもりは無いぜ？」
琴子「…今日は夜風が心地よかったからね。そのお礼さ」
ボンド「…地球にお礼とは、これはアカデミー賞ものだぜ」
光斗M「互いに失敗をフォローし合ってる！？無理矢理カッコつけていい感じにまとめる気だ！……さすがにバーテン…テッ

ドもこれは」

テッド、激しくシェイカーを振っている。どうやら上機嫌のようだ。

光斗M「よかったあ。ウケてるみたいだ。というか、さっきから振ってるあのシェイカーの中身、誰のだ？！」

コウ「（小声）あの～、盛り上がってるとこ申し訳ないんすけど、そろそろこっちの用件を……」

光斗「そうだった。（琴子に）おい、そろそろここに来た目的を言った方が」

琴子「勿論。（咳払い）ボンド、私達は今日は君に頼みがあって来たんだ」

ボンド「…探偵が他人に頼み事だと？これはアカデミー賞ものだぜ。で、なんだ？」

琴子「月影英華、彼女を知ってるだろ？」

ボンド「…懐かしい名前だな。懐かし過ぎてアカデミー賞ものだぜ」

光斗「あいつ「アカデミー賞ものだぜ」て言わないといけない病気なのか？」
琴子「彼のお気に入りなんだ。スルーしてくれないか？」
光斗「うわ、めんどくさ」
ボンド「…で、月影英華がどうした？内容によっては……えっと、：あー……えー…ノーベル賞ものだぜ……ちっ」
光斗「アカデミー賞そんなに気に入ってたのか！？いいよ、アカデミー賞で！」
琴子「彼女に会いたがってる人がいるんだけど、連絡が取れなくてねえ」
ボンド「研究所には？」
琴子「居ないみたいなんだよ。君は居場所知らないかい？」
ボンド「いいや、知らん。調べてもいいが、少し時間がいるな」
琴子「助かるよ、情報屋の腕の見せ所だね」
光斗「（小声）居場所がわかりそうだな」
コウ「（小声）みたいっすね」

テッド「お待たせ致しました。養命酒ロックです」

テッド、カウンターに養命酒の入ったグラスを置く。

光斗「本当にきたよ！？」

ボンド「…それじゃ」

琴子「ああ」

ボンド「今宵は友との再会と、ミッチとの出会いに」

琴子「乾杯」

光斗「なんか勝手に乾杯に巻き込まれた！？」

探偵事務所・事務所スペース・夜

帰宅してくつろいでる面子。

椅子に座って満足気な琴子。

ソファに座って疲労気味の光斗。ローテブルにコウ。

光斗「……なんか無駄に疲れたな、あの店」
琴子「ＢＡＲってあんな感じの店だよ」
光斗「絶対違うだろ！？あの店だけがおかしいんだ！」
琴子「ええ～そんなことない……はず」
光斗「本当はおかしいって分かってるだろ！？最後の間はなんだ？」
コウ「今は本多さんからの連絡待ち、という状況っすか？」
琴子「ボンドって：あ、もう店じゃないからいいか。うん、そうなるね」
コウ「どれくらい待てばいいんすか？」
琴子「あれでも腕は確かだから、そう時間は掛からないよ」
光斗Ｍ「白い建物が視えたのは四日後だったから、確かにそんなに待たずに済むだろうな……となると」
光斗「それまでの間、何して過ごすんだ？」
琴子「正直、特にやること無しさ。明日から暇だね」

光斗「地味に嫌だな……」

右腕をそろりと手を上げるコウ。

コウ「あの～それなら…ちょっとお願いがあるんすけど……いいっすか？」

琴子「どうぞ。たった今、暇モードにトランスフォームしたからいい暇つぶしを頼むよ」

光斗「なぜロボットみたいな表現なんだ？」

コウ「自分のラーニングに付き合って欲しいんすけど…」

光斗「ラーニング？」

コウ「まあ簡単に言うと、お喋りしながら街中を探検してみたいっす。より多くのデータを入れたいので」

琴子「つまり、人間とそれに関する事を学びたいんだね？」

コウ「そうっすそうっす」

琴子「そしていつの日か「お前達人間の行動を予測するなど、造作もない」と言えるよ

うになりたい、と」
光斗「何で強キャラポジションになってるんだよ！？」
コウ「そうなる希望は無いっすけど、学びたいんす。人間の役に立つのが自分の仕事なんで」
光斗「ふ～ん……」
琴子「（光斗に）だってさ」
光斗「え、僕が手伝うのか？」
琴子「私はほら、連絡を待たないといけないし、他の依頼人が来た時の対応をしなきゃだし？都合のいい暇人は君だけじゃないか」
光斗「はあ！？そんなわけ……僕しかいないな」
琴子「理解が早くてよろしい。これで安心して百合漫画が読めるよ」
光斗「本命それだろ！」
コウ「百合…」
光斗「ああえ～っと、百合っていうのはだな…あ～、花の」

コウ「簡潔に言いますと、女性同士の恋愛っすよね？」

光斗「どうしてそっちの知識が先に出るんだ？！」

コウ「博士が百合とはそういうものだと…」

琴子「彼女の入れ知恵か。これは他にも知識に偏りがありそうだねえ」

光斗「不憫だ……」

琴子「変態ＡＩの育成なら、私も進んで協力するけど、いいかい？」

光斗「よくない！僕がラーニングを手伝うよ！」

コウ「感謝します！」

琴子「（笑顔で）あれま残念～」

光斗Ｍ「後になって僕は思った……はめられた、と」

（続きます）